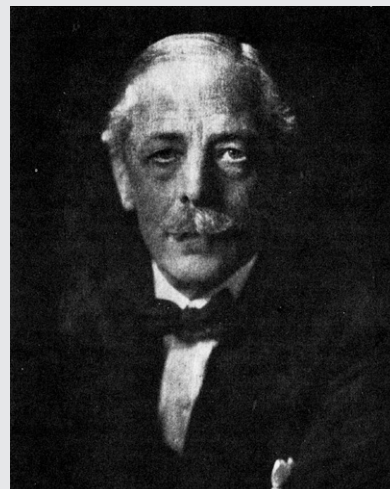


コーベト海洋戦略の諸原則

シリーズ編者序文

「シー・パワーの古典」シリーズは、専門的な海軍思想の主要な著作を、信頼できる同型版で容易に手に入るようにしている。何世紀にもわたる海軍の発展を示す、海の戦いの理論と戦略、戦術、作戦、その他の重要な問題に関する、これらの主要な独創的書籍は、その雄弁さと適時性のために選ばれた。このシリーズは歴史や選集、その他の解釈用の著作の一種であり、二次資料を読むことだけからでは得られないような理解の深みをもたらすだろう。

ジュリアン・コーベットの『海洋戦略の諸原則』は、二〇世紀の初頭にこの主題が理解されていたような、戦時における海軍力の使用に関する最も洗練された普遍的宣言を提示している。クラウゼヴィッツの『戦争論』を読んで刺激されたコーベットは、海軍の戦いに固有の問題に、普遍的かつ哲学的なアプローチを適用した。海軍史に関する彼の広範な知識を用いて、コーベットはアルフレッド・セイヤー・マハンとフィリップ・コロムが以前に展開した考えの一部を研ぎ澄ますことができた。これらの以前の著述家が特定の点に関して解明し



Julian Stafford Corbett  
ジュリアン・スタフォード・コーベット

たことを補完して、コーベットは、この主題の包括的なジンテーゼの最初の成功した試みと考えられるべき著作を書き、それを一般的な戦争の理論およびシー・パワーと戦略、海の戦いの具体的な問題の両方と結びつけた。彼は航空機、潜水艦、そして宇宙が海の戦いにおいて持つことになる重要性を予見することはできなかったが、彼の著作は将来に及ぶ強い影響力を持っている。特に、第三部は最近では「作戦術」と呼ばれるようになったものを扱う初期の試みである。コーベットはこの用語を使わなかったが、彼の主題は同じだ。すなわち、兵站および敵の力と野心により制約される空間と時間において、戦略ビジョンを成功した軍の活動へと変換する、戦略と戦術の間にある分野である。

シリーズ編者

ジョン・B・ハッテンドルフ

〔米海軍戦争大学校、ロードアイランド州ニューポート〕

ウエイン・P・ヒューズ・ジュニア

〔米海軍大学院、カリフォルニア州モントレール〕

## 目次

資料に関する註釈と謝辞——009

編者序文——011

序論 戦争の理論的研究——その利用と限界——026

## 第一部 戦争の理論

067

第一章 戦争の理論——038

第二章 戦争の性質——攻勢と防勢——087

第三章 戦争の性質——限定と無制限——100

第四章 限定戦争と海洋帝国

——限定された領域的目標に関するクラウゼヴィッツとジヨミンの理論の発展と現代の帝國的状況への適用——114

第五章 介入戦争——無制限戦争への限定的な干渉——125

第六章 限定戦争における強さの条件——139

第二部 海の戦いの理論 159

- 第一章 目標の理論——制海——160  
第二章 手段の理論——艦隊の構成——182  
第三章 方法の理論——戦力の集中と分散——211

第三部 海の戦いの遂行 245

第一章 序言——246

- [1] 陸上と海上における戦争の条件に固有の差異——246  
[2] 海軍作戦の典型的な形態——255

第二章 制海を確保する方法——262

- [1] 決戦を得ること——262  
[2] 封鎖——283

第三章 制海を争う方法——316

- [1] 防勢の艦隊作戦——「フォート・イン・レイナム」——現存艦隊——316  
[2] 小規模な反撃——339

第四章 制海を行使する方法——347

- [1] 侵略に対する防衛——347  
[2] 通商の攻撃と防衛——383  
[3] 軍事遠征の攻撃、防衛、そして支援——409

附録 「グリーン・パンフレット」 441

編者の註釈——442

海軍史講義で用いられる戦略用語および定義——444

戦略に関する覚書——477

附図——514

訳者あとがき——524

索引——541

〔訳文凡例〕

- ❖ 訳者追記は本文中に〈 〉内に記した。
- ❖ 編註はページ下段に▼で、訳註はページ下段に❖で示した。編註に追記する場合には訳註。……〈 〉とした。
- ❖ 原書編註には多数の誤りが含まれていたため、編者に確認した上で修正を施した。
- ❖ 編註における階級表記は以下を基準として一部修正した。人物の説明の際には最終階級、出来事の説明の際には当時の階級。ただし、イギリス海軍軍人以外に関しては編註で階級表記の有無が一貫していないため、明らかな誤記を除き修正しなかった。本文中では、コーベットは基本的に階級表記を用いていない。
- ❖ 訳註の作成、編註の確認にあたっては、コーベットの各著作のほか、以下の書籍等を中心に参照した。Peter Kemp, ed., *The Oxford Companion to Ships & the Sea* (Oxford, 1976); R.G. Grant, ed., *Battle at Sea: 3000 Years of Naval Warfare* (London, 2008); T.A. Heathcote, *The British Admirals of the Fleet 1734-1995: A Biographical Dictionary* (Barnsley, 2002); N.A.M. Rodger, *The Command of the Ocean: A Naval History of Britain, 1649-1815* (London, 2004); Richard Harding, *Seapower and Naval Warfare, 1650-1830* (London, 1999); Lawrence Sondhaus, *Naval Warfare, 1815-1914* (Abingdon, 2001); *Oxford Dictionary of National Biography*.
- ❖ 人名、地名は基本的に各国の原語の発音を採用した。ただし、一部英語表記が相応しいと思われる場合にはこの限りでない。例えば、アシャント島、ジャットランド海戦など。
- ❖ 軍事用語については、現代的な用語や旧日本陸海軍の用語を参照したが、時代性を反映しているものやコーベットの理論的概念に関しては極力原語のニュアンスを活かし、あえて現代的な用語に統一しなかった。例えば、近接封鎖／散開封鎖など。

資料に関する註釈と謝辞

コーベット文書は、コーベットの娘婿であり、以前の管理人だったブライアン・タンストール (Brian Tunstall) の死に際して、一九八一年に英国国立海事博物館<sup>ナショナル・マリタイム・ミュージアム</sup>に移管された。博物館の所蔵史料の中のMS 81/143である。まだ再分類されていないので、編者の引用では、P・M・スタンフォード (P.M. Stanford) とD・M・シュアマン (D.M. Schuman) の支援を受けてB・タンストールが編纂し、一九五八年にベッドフォードで三四部が私家出版された、『コーベット文書目録』の分類を利用した。ときに概略に過ぎないこともあるが、これで史料の場所を突き止めることが可能になる。これらの文書を利用するにあたって、博物館員のロジャー・モリス博士 (Dr. Roger Morris) とクリシー・マクラウド (Christie Macleod) に重要な助力をいただいたことを非常に感謝している。特に後者は、コーベットと彼の著作権代理人であったモリス・コリス (Morris Collis) の間で交わされた、別の一組の手書きの文通に私の注意を向けてくれた。興味深い資料が含まれていたこの文通は、博物館の所蔵史料の中のMS 67/030である。

一見すると、戦争の研究に理論を持って取りかかること以上に非実用的で、有益な成果をもたらすことが期待できないものはない。理論的な指針を求める思考習慣と戦争の遂行の成功に役立つ思考習慣の間には、実に本質的に相反する何かがあるように思える。戦争の遂行は個性と性格、常識、複雑で常に変化する要因に関する素早い決断の問題であり、またこれらの要因自体も多様でつかみ所がなく、不安定な精神的条件と物理的条件に依存するため、真に科学的な分析にまとめることなどは到底できそうにない。戦争の理論ないし「科学」を想像しただけでも、非常に「科学的」な士官たちが指揮官として失敗した、よく知られた事例が落ち着きなく頭に浮かんでくる。だが、その一方で、一九世紀初頭の偉大な理論家たちが理路整然とした戦争の理論を作り出そうと試みて以来、戦争の計画と遂行がそれ以前には知られていなかった方法、精密さ、理解

の確かさを獲得したことを否定するものはいないだろう。ましてや、最も賢明で成功した戦争の指揮官たちが古典的戦略家の著作を高く評価したことを否定するものなどいない。

本当のところは、理論への不信が、理論がもたらすと主張するものに関する誤解に起因するということだ。理論は、戦場における指揮力を与えると自負したりはしない。理論は、効果的な指揮力を高めると主張するに過ぎないのだ。理論の主たる実用的価値は、有能な人物が、自分の計画が万全を期しているとその分だけさらに確信し、突然の状況でもより素早く、より確実にあらゆる要因を把握することを可能にする、幅広い見地を得るのを助けることができることにある。最高の理論家自身が、このことを非常に率直に表現している。理論的研究について、彼はこう述べる。「理論的研究は戦争において指揮する人物の思考を育むべき、より正確にはその人物を独学へと導くべきであるが、戦場へと同行するべきではない」。

しかしながら、理論の実用性は、決して指揮官の能力への効果に限定されるものではない。指揮官が正しい決断をする能力を持つことだけでは不十分なのだ。彼の部下たちも、指揮官の決断の完全な意味を直ちに把握し、それを上手く適応した行動として確実に示すことができなければならない。このためには、

▼100 Karl von Clausewitz, *Von Kriege (On War)*, Book 2, Chapter 2, 一八三二年に初版がドイツ語で出版されたこの影響力の大きな戦略理論の著作は、いくつかの版や翻訳が出版されている。コーヘットはドイツ語の原典を用いて、それを自身の言葉で英語に翻訳したようだ。最新の、そして断然最高の現代英語版はマイケル・ハワード(Michael Howard)とピーター・パレット(Peter Paret)により編集および翻訳され、プリンストン大学出版から刊行された(Princeton, New Jersey, 1976)。便利な索引付きの第二版が一九八四年に登場した。以下の註では、この第二版の頁番号を示す。もちろん、コーベットとハワード/パレットでは正確な表現は異なる。例えば、ここでは後者は以下のように

関係者が皆同じ水準で考えるよう訓練されていなければならない。また、指揮官の命令はそれぞれの脳裏に同じ思考のプロセスを呼び起こさなければならず、彼の言葉は皆にとって同じ意味を持たなければならない。もし一七八〇年に戦術の理論が存在していたとすれば、そしてカーケット艦長がそのような理論の十分な訓練を受けていたとすれば、彼がロドニーの信号を誤解するなどということはありえなかったに違いない。現実には、その信号の意図は不明瞭であつて、その信号が示す戦術的方策の説明をロドニーが怠つたことが、勝利を一番必要としていたまさにその時に、自国から勝利を奪ってしまったのだつた。省略された説明を埋め合わせる事前の理論的訓練は行われず、ロドニーの見事な着想は彼自身のほかには理解できなかった。

指揮官とその部下の知的連帯のためだけに理論が欠かせないというわけでもない。母国での会議テーブルにおいて指揮官とその上位者の同様の連帯を生み出すことに、さらに大きな価値がある。気短な大臣に彼の計画のどこが誤つていのかを納得させる知力も言葉も持たないがために、士官が無謀な作戦に黙つて従うことが何度あつただろうか？ そのうえ、たとえ最も円満な協議においてであつても、直面する状況を科学的に分析し、これから従事することになる闘争の全般的性格を認識することができないせいで、政治家と士官が首尾一貫

した戦争計画を決定できなかったことが何度あつただろうか？ 戦争の本当の性質が、より明るい歴史の光に照らされて事後に見えてくると同じぐらいはつきりと同時代人にも認識されることなど、滅多に期待できることではない。近距離では偶然的要因が過度に目立ってしまい、本当の地平線を覆い隠してしまふ傾向がある。そうした誤りをなくすことなど滅多にできないが、理論的な研究により誤りを減らすことはできるし、ましてや後世の人々が私たちの誤りを読み取る明瞭な視界に近づくことを望み得る方法はほかにない。実際、理論とは教育と討議の問題であつて、決して遂行の問題ではない。遂行は、私たちが実行力と呼ぶ無形の人間の資質の組み合わせに依存している。

そういうわけで、これが理論について偉大な権威者たちが皆主張してきたことなのだが、少なくとも彼らの筆頭たる者は、長年の参謀部での現役軍務の後に、この主張を最も重要視していた。彼は最後に記した覚え書きの一つにこう書いた。「実際の作戦においては、人々は彼らの判断によつてのみ導かれ、その判断は人々の才能の多寡に応じて的中したりしなかったりするだろう。偉大な将軍たちは皆このように行動してきたのだ……したがってそれは常に交戦中のことであり、それまでは判断力だけで十分だろう。しかし、自分で行動することではなく、討議の場で他者を納得させることが問題であるときには、すべて

述べている。「理論的研究は」  
未来の指揮官の思考を育むこと、ないしより正確には、彼の独学を導くことが意図されており、戦場まで彼に同行することは意図されていない」(p. 14)。

▼002 ロバート・カーケット艦長(Captain Robert Curket)、一七八〇年四月のマルティニーク沖の不成功に終わった戦いにおける六四門戦列艦スターリング・キャッスル号の指揮官。カーケットは、フランスの八八門艦フッドロワイヤン号を拿捕した際のモンマス号の副艦長としての功績により、一七五八年に急速に昇進した。N・A・M・ロジャー(N. A. M. Rodger)は『The Wooden World (London and Annapolis, 1986, p.297)』でカーケットは「勇敢な士官かつ優秀な船乗りだが、最も知

的な新任艦長ではなかった」と述べている。

▼003 初代ロドニー男爵ジョージ・ブリッジス・ロドニー海軍大将(Admiral George Brydges Rodney, first Baron, 1719-92)。賛否両論のあるイギリス提督だが、アメリカ独立戦争におけるフランスを相手とする二つの主要な交戦、一七八〇年一月一六日のサン・ビセンテ岬沖の「月光の海戦」と一七八二年四月一二日のドミニカにおけるセイントスの海戦の勝者。二者択一の見解については、D. Spiney, *Rodney* (London, 1969) →Rodger, *op. cit.*, pp. 33-37を見よ。

▼004 マルティニーク沖で、ロドニーの戦列の先頭艦の艦長カーケットは、提督の信号「全艦は風上から迫り、対応する艦に向かえ」を、ロド



は明瞭な概念と物事に内在する関係の解説に依存する。この点についてはほとんど進歩がないので、ほとんどの討議は確かな根拠のない口論に過ぎず、誰もが自分の意見を保持したまま終わるか、もしくは相互尊重を理由とする妥協——何の実質的価値もない中庸——に終わるのだ<sup>005</sup>。

こうした議論に関するこの著者の経験は豊富で、彼自身が体験したことだった。戦争の問題に関する発想と要因の明瞭な概念、そしてそれらの関係の明確な解説が、彼の目からみれば散漫で目的のない議論の救済策だった。そして、この概念と解説こそが、私たちが理論や戦争の科学というときに意味するすべてののだ。それは、私たちが自分たちの発想を調整し、私たちが用いる言葉の意味を定義し、本質的な要因とそうでないものの差異を把握し、誰もが合意する根本的情報を定めて解説するプロセスである。こうすることで、私たちは実用的な議論の装置を用意し、諸要因を扱いやすい形に整理して、それから正確に素早く実用的な行動方針を演繹する方法を手にするのだ。こうした装置がなければ、二人が同じように考えることすらできないし、まして両者を分かっ本当の相違点を切り離して、穏当な解決策のためにそれを隔離しておくことなどは望めない。

私たち自身の事例では、戦略理論の価値に関するこの見方には特別な重要性

があり、それは戦略理論の大陸の<sup>コンチネンタル</sup>主唱者が考えるより遙かに広範に及ぶものだ。世界規模の海洋帝国にとって、戦争の遂行の成功は、しばしば母国の枢密院会議室での決定によるだけでなく、世界中のあらゆる場所での戦隊司令官と現地軍民当局の間、さらには隣接海軍管区<sup>ステーション</sup>の司令長官の間での協議の結果にも依存する。その帝国が関与する戦争の最中ないし戦争の準備をしているとき、準備は常に、海軍と陸軍、政治の考察の相互関係に基づかねばならない。中間的効率の方針は本国から暗示されるが、現地で、それも陸海軍のどちらも支配的でない諸要因に基づいて作り出されなければならない。協議は常に必要であり、協議が成功するためには共通の表現手段と思考水準がなければならぬ。この本質的な準備を提供できるのは理論的研究だけである。そして、帝国の軍務においてより大きな責任を熱望するものすべてにとって、この点においてこそ理論的研究の実用的価値が存在する。

この観点からすると、抽象的な戦略研究の価値は実に大きいので、私たち自身をその過大評価から守ることが必要だ。古典的戦略家たちは、私たちが示唆した可能性以上のものを彼らのいわゆる科学が持つと主張するどころか、戦略研究が与えられないものを求めることの危険性を繰り返し強調する。彼らは「科学」という名前そのものを拒絶しすらするのだ。彼らはより古くからある

ニーが以前に攻撃を集中するよう命じていた敵の後衛の艦ではなく、フランス側の戦列の先頭艦を攻撃する命令だと解釈した。ロドニーの計画はこうして挫折し、勝利は否定された。Spinney, op. cit., pp. 33-32を見よ。

005 Clausewitz, *On War*, p. ix. 引文はグラハム大佐 (Colonel J. Graham) によるドイツ語第三版を参照しているが、必ずしも彼の訳に正確に従っているわけではない。(原註。一八七三年にロンドンの N. トリュブナー社 (N. Trubner) によって初版が刊行された J. J. グラハム大佐の翻訳は、F. N. モード大佐 (Colonel F. N. Maude) による新しい序文と註釈とともに、キーガン・ポール・トレンチ・トリュブナー社 (Kegan, Paul, Trench, Trubner and

Company) と名前が変わった出版社により再版されたばかりだった。しかしながら、コーベットの数は少ない註で一八七三年の初版を参照する。一九〇八年版は一九六二年まで連続して再版され、ハーワードとバレット「P.」が指摘するグラハムの多数の不正確で不明瞭な訳にもかかわらず、長いことクラウゼヴィッツのアンクローサクソン版のスタンダードであった。コーベットの引用部はハーワード/バレット版の「P.」にある。モードは脚註「P.」で以下のよう<sup>1</sup>に述べている。「クラウゼヴィッツは、明らかに一八一三年のライプツィヒの会戦におけるホーミア軍司令部での終わらない協議を脳裏に浮かべていた」。



ジュリアン・S・コーベット、法学修士

## 海軍戦略

### 序言

海軍戦略は独立した知識の分野としては存在しない。それは戦争術の一部門の一区分に過ぎない。

士官の研究対象は戦争術であり、海軍戦略を専門とする。

そういうわけで、正しい手順は戦争の一般理論を理解することであり、それによって全体に対する海軍戦略の正確な関係を確かめることだ。

### 戦争の理論

戦争とは政治交流の一形態であり、私たちの目的を達成するために武力が導入されたときに始まる対外戦略の継続である。

### 目標

私たちはある目標に武力を向けることで目的<sup>エンド</sup>を達成しようとし、その目標は将来の目標または当面の目標である。

当面の目標（「一次目標」<sup>プライマリー</sup>とも呼ばれる）は、特定の作戦または行動の目的である。しかし、すべての一次目標には将来の目標もあることを覚えておかなければならない。すなわち、すべての作戦は、その特別の目標の観点からだけでなく、その戦役ないし戦争の目的への一段階としても考慮されなければならない。

## 索引

### あ

アイルランド 225, 239, 252, 297, 299-300,  
321-322, 324, 328, 336-337, 356, 372, 375, 377,  
385-386, 412  
アシャント島(ウェサン島) 225-227,  
230-231, 235-236, 239, 280-281, 295, 333-334, 336,  
378, 399  
アドリア海 387, 427  
アパークロンビー, ラルフ(陸軍中将)  
422, 430  
アマースト, ジェフリー(陸軍元帥) 416  
アメリカ合衆国 11, 32-33, 35, 45-46, 173,  
177-178, 198, 263-267, 270, 279, 293, 404-405,  
454, 457, 472, 475, 488, 507  
アルザス=ロレーヌ 112, 114, 118  
アレクサンドリア 422  
アンコーナ 427  
アンソン, ジョージ(海軍元帥) 186-189,  
196-197, 207, 210, 278, 291, 350, 423  
アントウェルペン 136  
アンブレトゥーズ 370

### い

イエナ 155  
イベリア半島 119, 126, 128, 131-132, 135-137,  
179  
イル・ド・バ 278, 423  
インド 11, 173, 405

### う

ヴァルヘレン島 134-135  
ヴァルモーデン=ギンボルン, ルートヴィ  
ヒ(陸軍中将) 79  
ウィーン 116  
ウィリアム三世 161, 321, 328, 337

ヴィルスーヴ伯爵(海軍中将) 227-231, 278,  
281-282, 287, 301, 313, 334, 390, 499  
ウェリントン公爵 94, 119-120, 126, 132, 152,  
179  
ウォレン, ジョン(海軍大将) 351  
ウラジオストック 149, 492, 502  
ウルフ, ジェームズ(陸軍少将) 137, 304,  
416, 436-437

### え

英仏海峡 97, 173, 220, 226, 232-233, 236-239,  
252, 270, 282, 292-293, 314, 322, 324, 330, 332,  
336, 352-353, 365, 369, 371, 374-377, 385, 393,  
396, 484  
エジプト 352-353, 355  
エリオット諸島(長山列島) 96  
掩護戦隊 414-433

### お

鴨緑江 154  
オーストリア 116, 135, 278, 427  
オード, ジョン(海軍大将) 334  
オランダ 96, 131, 149, 174, 201, 209, 220, 222,  
225, 233, 235-237, 240-241, 249, 268, 272,  
274-277, 298, 321-323, 337, 339, 361-362, 386,  
452, 462, 475, 485, 495, 510  
オルヴィリエ伯爵(海軍中将) 376

### か

カーケット, ロバート(艦長) 58  
ガードナー, アラン(海軍大将) 301  
カール大公(オーストリア) 76-77, 116, 135  
海軍戦略と海洋戦略 69  
——大戦略と小戦略 446-448, 478-481  
海洋交通路 23, 41, 47, 165, 167, 173, 196, 399,

460-461, 464, 471-475, 493-494, 497, 507-510  
——共通の交通路の理論 173-174, 197  
格言

——「海はすべて一つ」 176  
——「海域の征服」 162, 462  
——「艦隊の眼」 189-190, 201  
——「現存艦隊」 39-40, 259-260, 316, 321,  
325, 330-331, 334-335, 345  
——「敵艦隊を捜し出す」 23, 176, 251, 254,  
259, 266-267, 272, 279-280, 282, 297, 308,  
474-475, 509-511  
——「敵の海岸が我々の国境」 34, 162,  
203, 254, 308-309, 473, 508

カディス 135, 226-227, 231, 235-237, 278, 287,  
322, 339, 387, 473, 509  
カナダ 11, 117, 120, 150, 291, 317, 454, 481, 488  
上村彦之丞(海軍大将) 266

カリブ海 233  
ガリポリ 43, 417

カルタヘナ(スペイン) 387  
監視戦隊 206, 268, 331

関東半島 423  
ガントーム伯爵(海軍中将) 293-294, 301,  
307, 351-352  
ガンフリート 323, 325-326, 328

### き

キース子爵(海軍大将) 351, 422  
ギシェン伯爵(海軍中将) 235, 333  
北直隸海湾(渤海湾) 141, 438  
キブロン湾 179, 279, 295, 372, 475, 510  
喜望峰 180  
牛荘(营口) 438  
キューバ 120, 177, 263-265, 456-457, 489  
キュリユー号 282  
狭海(ナロウ・シー) 209, 307  
キリグルー, ヘンリー(海軍大将) 322-324,  
329, 335

### く

フォン・グナイゼナウ, アウグスト(陸軍  
元帥) 78-79  
クラウゼヴィッツ, カール・フォン(陸軍  
少将) 3, 18, 21, 29-30, 148-149, 155  
——軍歴 78-79  
——戦争計画 105, 111-112  
——「戦争論」 3, 79, 105  
——理論 79-85, 100-120, 122-123, 125-127,  
140-145, 453, 485, 487, 506  
グラヴリース 475, 510  
クラフト侯子 21, 143  
クリア岬 399  
クリスチャン, ヒュー(海軍少将) 430  
クリミア 120, 128, 150, 379, 416-419, 435  
クレイグの遠征 134  
クロムウェル, オリバー 76-77, 249, 257, 274  
軍法 257, 274

### け

軽戦隊 206-207, 268  
ケベック 416, 422, 436-437  
フォン・ケメラー, ルドルフ(陸軍中将)  
21, 144-145  
「現実の戦争」 80, 82  
限定戦争 18, 30-31, 51, 104-108, 115, 117-128,  
132, 139-157, 247, 262-263, 456, 489  
ケンベンフェルト, リチャード(海軍少将)  
222, 235-237, 239, 294-298, 300, 312, 331-335,  
338, 373-374, 377, 382

### こ

黄海 502  
攻勢の理論 87-94, 98-99  
コーク 179, 231, 385  
コールダー, ロバート(海軍大将) 257, 282  
コーンウォリス, ウィリアム(海軍大将)  
231, 256, 280-282, 301, 304

〔著者〕  
ジュリアン・スタフォード・コーベット ◆ Julian Stafford Corbett

一八五四―一九二二年。イギリスの海軍史家、海洋戦略家。ケンブリッジ大学法学部卒。一九世紀末から海軍史の著作を執筆し始め、英海軍大学校で海軍史を講義した。海軍記録協会のために史料編纂を行い、日露戦争および第一次世界大戦の公式海戦史を執筆した。主著は *Some Principles of Maritime Strategy* (1911)、『海洋戦略の諸原則』のほか、*England in the Mediterranean* (1904) や *The Campaign of Trafalgar* (1910) など。

〔編者〕  
エリック・J・グロウヴ ◆ Professor Eric J. Grove

イギリスを代表する海軍史家の一人。ダートマスの英海軍兵学校とグリニッジの英海軍大学校、またケンブリッジ大学、ソルフォード大学、リヴァプール・ホープ大学で教鞭をとった。多数の著書があり、海軍研究協会および海軍記録協会の副会長を務める。英国軍事史・海軍史委員会会員、王立歴史協会フェロー、米海軍名誉上等兵曹。

〔訳者〕  
矢吹啓 ◆ Hiraku Yahuki

東京大学文学部卒業、東京大学大学院修士課程修了、東京大学大学院博士課程満期退学。キングス・カレッジ・ロンドン戦争研究科博士課程留学。日本学術振興会特別研究員。主として一九世紀から二〇世紀初頭にかけてのイギリス海軍史・海戦史および日英関係史を研究している。主要業績として、『Britain and the resale of Argentine cruisers to Japan before the Russo-Japanese War』 *War in History*, Vol. 16, No. 4 (2009)、『二〇世紀初頭の英国海軍史における修正主義——フィッシャー期、一九〇四―一九一九』歴史学研究（第八五一号、二〇〇九年）、「ドイツの脅威——イギリス海軍から見た英独建艦競争、一八九八―一九一八年」『ドイツ史と戦争』彩流社、二〇一一年）など。

## コーベット海洋戦略の諸原則

二〇一六年九月三〇日 初版第一刷発行

著者——ジュリアン・スタフォード・コーベット

編者——エリック・J・グロウヴ

訳者——矢吹啓

発行者——成瀬雅人

発行所——株式会社原書房

〒一六〇―〇〇二一 東京都新宿区新宿一―二五―二三

電話・代表 〇三(三三五四)〇六八五

<http://www.harashobo.co.jp>

振替・〇〇一五〇―六一一五―一五九四

ブックデザイン——小沼宏之

印刷——新灯印刷株式会社

製本——東京美術紙工協業組合

©Hiraku Yahuki, 2016  
ISBN978-4-562-05345-2  
Printed in Japan

Some Principles of Maritime Strategy by Julian Stafford Corbett

This book was originally published in 1911 by Longmans, Green and Co., London.

Introduction and notes copyright © 1988 by the United States Naval Institute, Annapolis, Maryland

Japanese translation rights for Introduction and notes arranged with Naval Institute Press, Annapolis, Maryland through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo